

本性は塩対応のスパダリ警察官が
私にだけ甘く愛を囁いてきます

プロローグ

絶対に振り向いてくれない。そんなふうに思っていたのに、人生はどこでどう転ぶかわからない。ずっと懂れ、一方通行の恋をしていた彼に組み敷かれている今、そんなことを頭の片隅で考える。少し前の愛莉^{あいり}にしてみたら想像もできないことが起きているわけで、どうしたってこれが現実だとは思えない。夢なのではないかと疑ってしまう。

でも、それはもう仕方がないだろう。

現実逃避をしないと冷静になれないほど、あり得ない現実が自身に降り注いでいるのだから。

すっかり身体と心は彼によって蕩^{よち}けてしまい、自分の身体だというのに言うことを全く聞いてくれない。

それなのに彼の言うことだけを聞こうとするなんて、少し酷くはないだろうか。

心の中で自分の身体に小言を呟きながら乱れた呼吸を整えようとするのだけれど、次から次によって快楽を植え付けられてしまう。

そんな状態で落ち着けるはずがない。

これ以上の快感を味わってしまったら、このあとどうなってしまうのだろうか。

そんな心配をしてしまうぐらい、身体はトロトロに蕩けてしまっていた。身じろぎをしてシャツが身体に触れるだけで、甘い吐息を零してしまう。

処女なのに、こんなに感じてしまうのはおかしくないだろうか。恥ずかしさが込み上げる中、そんな不安をこっそりと胸に忍ばせる。

——私を感じすぎてしまうのは、ゼーんぶ堂さんのせいだ。そうだ、そうだ！

そんなふうに責任転嫁をして、自分は悪くはないと無理矢理言い聞かせた。

だが、すぐに青ざめる。もし、自身の身体が敏感すぎるといふ訳ではないのなら、堂がこういうことに関して経験値が高いということだ。

そんな裏付けができてしまい、それはそれでイヤだとまたもや自分勝手なことを考える。

一人で赤くなったり青くなったりしている愛莉に、彼は優しく命令してきた。

「ほら、愛莉。こっちを見て」

「堂さん……」

憧れているだけだったあの頃には一度も聞いたことがないほど声が甘い。

耳元で囁かれ、それだけで胸が幸せで高鳴る。

やはり、これは壮大な夢なのかもしれない。こんなふうにいつまでも現実だと受け止められないでいるのは、彼のせいでもあるのだ。絶対にそうだ。

ギャップがありすぎるだろうと強く批難しても許されるほど、塩対応だった頃の彼と今とは違う。

粉砂糖と蜂蜜をたっぷりかけて食べるフレンチトーストより、絶対に極甘で濃厚だ。

彼の大きな手のひらが、愛莉の頬を優しく撫でる。その手つきでさえも優しく甘い。

「もっとキスさせて……愛莉」

実は、もうキャパオーバーだ。愛莉が恋愛にもセックスにも超初心者だということを、彼は忘れていないだろうか。

もう無理だと思いつつも、この幸せな時間がもっと続いてほしいと願う愛莉の心はシーソーみたいに揺れている。

「愛莉……」

ダメだ。そんな甘えた声で堂にお願いされたら、彼にこの心を捧げますと常に挙手をしているも同然の愛莉に断れるはずがない。

でも、これ以上彼とキスをして、その先もしたとしたら……ますます痴態を見せることになるないだろうか。それが、とても心配だ。

彼の唇が誘惑してくるのを見て、胸が苦しくなるほどドキドキしてしまう。

だって、知ってしまった。

堂の唇に触れると、どうしようもなく幸せな気持ちになるということ。

その幸せをもう一度味わいたいと身体が疼き、羞恥心を捨てた。

痴態なんて、すでにいっぱい晒している。それならば、一つや二つ増えようが変わらないだろう。開き直った人が一番強い。まさに今の愛莉だ。

「うん……」

自分でもビックリするほど甘えた声で返事をする、彼は目尻を下げてほほ笑んでくる。

——あ、好き。大好き！

格好いい堂が、男性の色気を纏^{まと}ってセクシーになった。

こんな顔、自分以外の女性の前では絶対にしない。そんな独占欲が込み上げてくる。

彼の唇が触れてきた。その感触ですら、とても優しくて魅力的だ。

やはりこれは夢かもしれない。でも、もし夢だったとしたら覚めないで。

そんなことを頭の片隅で考えながら、再び彼からのキスに溺れていった。

1

その日も愛莉は駅までの道を軽快に歩きながら、ショーウィンドウに映る姿をチェックしていた。

小柄な愛莉の背中では、焦げ茶色の髪が揺れている。今日も念入りにブローしてきたので艶々だ。大人な女性を指しているのだが、各パーツがどれもかわいらしい印象で、年齢より少し幼く見えてしまうのが愛莉の悩みの一つである。

長い睫毛が印象的な目はアーモンド型をしていて、好奇心が隠せず洩^{はっ}刺^さとしていた。その理由は……

——今日も素敵です。眼福であります……っ！

自宅最寄り駅前、スクランブル交差点の手前には交番がある。

そこに立つ警察官こそ、愛莉が恋をしている堂だ。

歩を進めると、彼の姿が遠目に見えてきた。

スラリと背が高く、足なんてどれだけ長いのだと二度見るほどで、スタイルが完璧である。

職業柄きちんと身体を鍛えているのだろう。ガッシリとした身体には警察官の制服がよく似合っている。

短髪の黒髪は艶やかであり、目鼻立ちはすっきりとしていてまさに「ハンサム」というのはこういう人のことを言う」という見本みたいな人だ。

遠くにいても、彼の姿がすぐに視界に飛び込んでくる。

思わず拝み倒したくなるほど、愛莉の目には彼から後光が差しているように見えた。

——今日も変わらず格好いい。

常にスポットライトで照らされているに違いない。

そんなバカなことを考えてしまうぐらいに、彼はキラキラと輝いている。

こっそりと心の中で手を合わせながら、ドキドキしている胸に「静まって」とお願いした。

交番まで、あと五十メートルほど。一歩足を動かすたびに、心臓は高鳴り苦しくなってくる。

堂の前を小学生数名が歩いていくのが見えた。

彼らは「おはようございます！」と元気いっぱいな声で堂に挨拶をしている。

そんな彼らに「おはよう。気をつけて。今日も一日頑張つて」と言う。

声は優しさに満ちていて、聞いているこちらが幸せな気持ちになる。

小学生たちは「はい」と元気よく返事をする、彼の前でピシッと敬礼をした。

優しい眼差しで彼らを見たあと、堂は彼らに敬礼を返す。

この交番前ではよく見かけるが、なんともほんわかと幸せな気持ちになる光景だ。

「じゃあね」

小学生たちが手を振って去っていく姿を見て、堂も手を振った。

一分一秒無駄にできない殺伐とした朝の風景が、彼らのやり取りで空気が和んだ。

周りの人たちも、頬を緩ませている。

いいものが見られた。一日仕事を頑張れるだろう。思わず足取りも軽くなる。

先程の小学生とのやり取りを見てもわかるように、堂はとても優しい人だ。

しかし、そのことを知っているのは、残念ながら愛莉だけではない。

ここを通る女性は、堂の魅力を知っているはず。誰もが一度は彼に頬を赤く染めたことがあるのではないか。

そんな疑いを抱いてしまうぐらい、堂は人気があるのだ。

下は赤ちゃんから、上はご年配のおばあさまたちまでも虜にしている。

堂が交番前に立つ日は、なぜだか立ち止まって声をかける女性が多いのがその証拠だろう。

彼の爽やかさに心をとぎめかせ、彼の低くて魅惑的な声に頬を赤く染める。

そんな一連の流れを何度も目撃していた。

ライバルは山のようにいると考えていいだろう。そう考えるとへこたれそうになるが、それでも

少しでも彼の印象に残りますように。心の距離が縮みますように。

そんなふうに願いながら、歩調を調節する。

——頼むから、信号よ。赤になってちょうだい！

普通なら「信号で止まりたくないから、赤にならないで」と願うことだろう。

この恋心は大事にしたいと思っっているし諦めたくないとも思っている。

少しでも彼の印象に残りますように。心の距離が縮みますように。

そんなふうに願いながら、歩調を調節する。

——頼むから、信号よ。赤になってちょうだい！

普通なら「信号で止まりたくないから、赤にならないで」と願うことだろう。

朝の忙しい出勤時などは、誰だっと思うのが普通だ。一分一秒を無駄にできない。そう考える人が大半なはず。

しかし、愛莉は違う。どうかして赤信号に捕まってしまいたい。そうすれば交番前で足を止められて、堂に挨拶ができるからだ。

毎日、堂が交番前で立っているわけではない。ひと月の中でも数えるほどだ。

だからこそ堂が立っているときには、何が何でも交番前で立ち止まりたい。

前回は信号が運悪く青になってしまい、挨拶ができなかった。

信号が青になれば人の流れが速くなり、交番前まで行けずに横断歩道を渡らなければならなくなる。

どうにか赤になるタイミングで交番前に行けるように歩調を合わせようとするのだけれど、往來を歩く人もいるのでのんびり歩いていたら邪魔になってしまう。

それに変な動きをしていたら周りから不審がられる。それは避けたいのだけれど……

歩調と信号の変わるタイミングを合わせるのが、とにかく難しい。

さて、今日はうまくいくだろうか。

歩幅を調整しながら慎重に足を運ぶ。

「ヨシッ」

小さく呟き、グッと拳を握る手に力が入る。

今日はうまく信号に捕まることができて、交番前に辿り着いた。

いつも鏡で練習しているとびっきりの笑顔を準備しつつ、堂の前に立つ。

少しでもかわいらしく見えますように、と願いながら彼に声をかける。

「おはようございます、堂さん。急に寒くなりましたね」

「おはようございます。ええ、気温が一気に下がりましたから。今日一日かなり冷え込むらしいですよ」

堂に満面の笑みを向けられ、それだけで心が浮き立ってしまう。

声が弾んでしまいそうになるのをグッと堪えながら、背の高い彼を見上げる。

「これから忙しい季節に入りますから、大変ですよね」

現在、十一月初旬。ここから年末にかけて街が賑やかになっていく。

忘年会シーズンに突入するため夜になれば人出も多くなるし、何より宴会帰りの人たちでごった返す。

昨今そういった会をやめる動きが出ているところもあるようだけれど、それでも年末に向けてお酒を飲む機会が増えるのは確かだろう。

人出が増えれば、やはり警察官の仕事も必然的に増えることになる。

愛莉は身内に警察関係者がいることもあり、年末年始に彼らがとても忙しそうしているのを何度も見かけていた。

そういう意味を込めて言ったのだが、堂は少しだけ目を見開いて驚いたあとに目元を緩める。

「それはお互い様でしょう？ 日吉さんも仕事が忙しくなりますよね？」

確かにその通りだ。現在、入社して二年目の二十四歳。だんだんと任される仕事が増えてきた。年末近くになると、帰宅時間が遅くなってしまふことは昨年の教訓でわかっている。

今年はどうなるのか。考えただけで、恐ろしくなってきた。

そうだった……、と青さめながら呟くと、堂はこちらの心が晴れやかになるほど爽やかな笑みを浮かべてきた。

「夜遅くなる時があるかと思いますが、とにかく人通りのあるところを選んで帰宅してくださいね」

「はい！ わかりました……っ！」

堂の優しい気持ちが伝わってきて、ジーンとしてしまう。

警察官としての言葉だったとしても嬉しい。今日は朝からラッキー続きた。

赤信号で止まることができたし、堂とも挨拶ができた。その上、気遣いまでいただいた愛莉は天にも昇る気持ちだ。

ゲームでパワーアップアイテムをもらったときのように、現在の愛莉は無敵である。

嫌味を言うばかりの部長とばったり遭遇したとしても、笑顔で攻撃を躲<かわ>せる自信ありだ。

思わずその場でターンでも決めてスキップで駅へと向かっていきたい気持ちを抑えていると、堂が信号を指差した。

「青になりましたよ」

「あ……」

なんて短い逢瀬なのだろう。ガックリと肩を落としたが、確かにこうしてはいられない。

朝の一分一秒が無駄にできないのは、愛莉だって同じだ。

一本電車を遅らせてしまったら、さすがにマズイ。就業開始時間に間に合わなくなってしまう。

ようやく現実へと意識が向き、堂に会釈をしてその場を離れようとした。

すると、彼は愛莉に向かって声をかけてくる。

「いつてらっしゃい」

その声を聞いて、勢いよく振り返った。小さく手を振ってくれる堂を見て、幸せのゲージが満タンになったのを感じる。

「はい、いつてきますっ！」

こんなに優しい声で言われたら、誰だって笑顔になるだろう。

意図せずとも、とびっきりの笑顔になる。もう一度、彼に会釈したあと、すぐに横断歩道を渡った。

——今日は、いっぱい話せちゃった！

とはいえ、時間にしてももの一分だ。これでいっぱいとは言えないかもしれない。

それでも愛莉にとっては大満足の幸せタイムだった。この感激を噛みしめながら、駅の改札を抜けていく。

愛莉が堂と会えるのは、彼が勤務中のときのみだ。

それも向こうは仕事として交番前に立っている。そんな人と長話なんてできるはずがないし、迷

惑なんてかけられないだろう。

だからこそ信号待ちの限られた時間、それも堂が忙しくないときのみしかこんなふうに言葉を交わせられない。

今朝のように彼と挨拶以外の会話ができる日は結構レアケースだ。

「ああ、幸せ」

欲を言えば、もっともつと彼のことを知りたいし話したい。それが本音だ。

しかし、愛莉にはこれ以外の彼とお近づきになれる方法を知らない。

だからこそ、こうして高鳴る鼓動を抑えながら挨拶をする。今の自分ができる最大限の努力だ。

彼に恋心を抱いてから、早七ヶ月。顔見知り程度にはなれたが、なかなか次のステップには進めないのが現状だ。

「堂さんと、もっと話す方法はないかなあ」

小さく呟いた声は、通過電車が走る音でかき消される。

ずっと頭を悩ませているのだが、なかなか妙案は浮かんでこない。

何しろ彼との接点があまりになさすぎるのだ。そんな状況で彼との距離を縮めるのは難しい。

共通の友人でもいれば話が早いのだろうけれど、そんな伝はない状況だ。

唯一残された方法はある。だが、それはかなりハードルが高いのが難点だろう。

彼に直接誘いをかける。もしくは告白をする。この方法しか残されていない。

電車が通り過ぎたあとに残ったのは、愛莉の盛大すぎるため息だけだ。

——そんなの、絶対に無理だよおお……

なかなか前に進まない恋に打ちのめされている愛莉をよそに、大量の人を乗せた電車がホームへと滑り込んできた。

電車はゆっくりとホームへと到着して扉が開く。

車内の様子を見ただけで、うんざりしてしまった。

残念ながら、降車する人はまばらだ。ギューギュー詰めになっている車内へと果敢に挑む。

なんとか今朝も乗り込めたと安堵している間に、電車は次の駅へと向かって動き出した。

ガタゴトと揺れる車内でつり革を持ちながら、堂との出会いを思い返す。

堂が今の交番に配属される、ひと月ほど前。違う駅前交番で愛莉は彼に助けられた。

それが、彼との初めての出会いである。

桜の花が散り始めた、四月。大学の友人が結婚することになり、二次会にお呼ばれたときのことだ。

当時、愛莉の周りは誰も結婚をしておらず、人生初の結婚式の二次会に参加することになりドレスアップにも力が入っていたのだが……

それが思わぬ悲劇を招くことになってしまったのだ。

* * * * *

——気合い入れて、こんなにヒールの高いパンプスを履かなければよかったかも。
普段来ない街で、自分の足下に視線を落とし、小さく息を吐き出す。

このパンプスは、二次会に出席するために新調したものだ。履き慣れていないため、足先が痛くなってきた。

せめて何度が履いて慣らしておけばよかった。そんなふうに思っても、あとの祭りである。
半べそをかきながら、紫色がかった空を見上げた。

この街に降り立ったときはまだまだ陽は高い位置にあつたのだが、今はすっかり地平線の彼方へと落ちようとしている。

少しずつ暗くなっていく街。その光景を見るたびに心細さが加速していく。

二次会開始時間は十八時だが、会場最寄り駅には念のために一時間半以上前に到着していた。

降り立ったことがない駅である上、地図で見ても少しわかりづらい場所に会場があつたため早めに家を出てきたのだが……

やっぱり正解だったのかもしれない。

現在、絶賛迷子中だ。何度、同じ場所をグルグルと回っているだろうか。

元々方向音痴だということは自覚していた。だからこそ、早めにやって来たのだが……

まさか一時間近く経つても会場に辿り着けず、途方に暮れることになるとは思ってもいなかった。

「自分の方向音痴を甘くみていたかも……」

ため息交じりで呟いた声は、なんだか今にも泣き出してしまいそうなほど頼りない。

成人を迎えて数年経ち、世間では大人だと言われる年齢だ。それなのに、こんなことで泣いている場合ではないだろう。

「よし、もう一度頑張ろう！」

スマホの地図アプリだけが頼りだ。

——頼むぞ、アプリ！

そんなことを心の中で呟きながら、辺りをキョロキョロと見渡す。

先程は目の前の道を歩いてみたが、残念ながら会場を見つけることはできなかった。

それならば、今度は大通りから一本逸れた道を行こうか。

歩きスマホは危ないから、とアプリを終了してバッグに突っ込み、一步を踏み出そうとしたときだ。

背後から声をかけられた。

「何かお困りですか？」

「え？」

半泣き状態で振り返ると、そこには一人の警察官が立っていた。

二十代後半ぐらいの彼は、とても背が高い。思わず見上げ、勝手に緊張してしまう。

愛莉と目が合うと、警察官の男性は唇に笑みを浮かべた。

そのほほ笑みを見ていたら、硬直していた身体と心からゆっくりと力が抜けていくのがわかる。

救世主が現れた！ そんな気持ちになったからだろう。安堵感が半端ない。

絶^{すが}るような気持ちでいると、彼は柔らかな表情を向けてきた。

「かなり前から交番の前を何度も行き来していますよね？」

「交番……？」

「ええ。交番です」

彼が指差すところに交番が存在していた。どうして自分の目は交番を見落としていたのだろう。節穴もいいところだ。

さつさと交番で道を尋ねれば、こんなふうに迷子にならなくてもよかったのにとガックリきてしまう。

だが、そもそも交番を見つけられなかったのだから、やはり愛莉の目は節穴だということだ。

盛大に肩を落としていると、警察官の彼はクスクスと楽しげに笑い出した。

呆気にとられて彼に視線を向けると、「失礼しました」とこれまた優しい口調で謝ったあと、再度問いかけてくる。

「どこかに向かわれているのですか？」

これだけ交番の前をグルグルしていれば、自ずと迷子だとわかったのだろう。

いい大人が迷っていることが知られてしまい恥ずかしい気持ちでいっぱいだが、ここは救世主の助けを求めるのが正解なはず。

今日の主役である友人から送られてきた二次会の招待状を見せる。

「このお店を探しているんです」

すると彼は、困ったように眉尻を下げて駅の方面を指差した。

「この店でしたら、駅裏になりますね」

「駅裏……」

ということは、全然見当違いな場所で行ったり来たりしていたというのか。

愕然としていると、交番から飛び出してきた一人の警察官が声をかけてきた。

「たかどのさん。俺、そろそろ巡回に行ってきます」

「いや、いい。俺が代わりに行ってくる」

「え？ いいんですか？」

驚いた様子の同僚らしき警察官に、彼は小さく頷く。

「この女性、道に迷って困っているみたいなんだ。彼女を送りつつ、巡回を済ませてくるから」

彼、たかどのが、がそう言うと、その警察官は「わかりました」と頷いて交番へと戻っていく。

その警察官を見送ったあと、彼は愛莉を振り返った。

「では、行きましょうか」

「え……？ ええ!? 悪いですよ」

顔の前で両手を振り、全力で遠慮をする。

警察官は日々多忙を極めているだろう。そんな人をお願いするのは心苦しい。

行き方だけ教えてもらえれば一人で行くと主張したのだが、彼は首を横に振る。

「いえ、私が連れていきます。そうしないと、開始時間までに間に合わないかもしれないでしょ

う？」

彼は愛莉がどれほどこの辺りで迷子になっていたのか、すべて知っている。愛莉を一人で行かせたら、再び迷って二次会開始時間に間に合わなくなるかもしれないと危惧しているのだろう。

そのことに關しては反論できない。自他共に認める方向音痴は折り紙つきだ。

チラリと目だけで彼を見上げる。すると、彼と目が合った。

その瞬間、ドキッと胸が躍ってしまう。一瞬、呼吸をするのを忘れてしまっていた。

——格好いい……！

先程までは余裕が全くなくて気がつかなかったが、この警察官はかなりのイケメンだ。

それもこんなふうに優しくされてしまったら、勘違いしそうになる。

しかし、素敵な警察官と歩くのは気が引けてしまう気持ちもある。やっぱり断ろうと思っていると、彼は腰を屈めて視線を合わせてきた。

「ほら、行きましょう。お知り合いの門出です。お祝いしに行くのですよね？」

先程彼に招待状を見せたので、愛莉が結婚式の二次会へ出席することを察したのだろう。優しく問いかけてくる。

警察官として市民を助けてくれるつもりで、他意などない。

それはわかっているが、警察官がこんなに優しく親身になって接してくれるなんて思ってもいなかった。

今まで警察官には勝手に怖いイメージを持っていたのだが……

——おまわりさんって、丁寧で優しいんだ……

ホッと胸を撫で下ろしながら頷くと、彼と歩いていく。

この街にやって来たのは初めてだったことを話すと、彼は納得したように頷いた。

「北口と南口を勘違いして駅を出てきってしまう人は結構たくさんいるんですよ。ちよつとわかりづらいですからね」

「そうなんですね」

愛莉のように迷う人がいると聞いて、少し安心した。だが、「たかどの」は少しだけ意地悪っぽく笑う。

「でも、一時間近く粘って一人で目的地に行こうと頑張っていたのを見たのは貴女あなたが初めてです」「っ！」

恥ずかしくて顔を真っ赤にさせていると、急に彼は駅の構内にあるベンチを指差した。

「そこに座っていてください」

「え？」

それだけ言うと、なぜかドラッグストアへと走って行ってしまふ。

どうしたのかとオロオロしながら待っていると、彼はレジ袋を持って戻ってきた。

そして、中身を取り出すと差し出してくる。

「これ、使ってください」

「え？」

靴ずれを防止するためのパッドだった。驚いて目を瞬かせていると、彼は開封して手渡してくる。「足、辛くないですか？」

「あ……」

おろしたてのパンプスで歩き回ったせいだろう。

最初は足先だけが痛かったのだけれど、少し前からはかかとも擦れて痛みが走り出していた。

左足を庇うような動きをしていたので、気がつかれてしまったのかもしれない。

彼は心配そうに腰を屈め、愛莉を見つめてくる。

「自分は使ったことはないのですが、妹が靴ずれしたときに使っていて痛みが軽減したと言っていたので」

ビックリした。まさかこんなにも気遣ってくれるとは思っていなかったからだ。

道案内までさせてしまっているのに、こうして足の心配までしてくれる。本当に優しい人だ。

感激して何も言えずにいますと、急に彼は慌てふためき出す。

「あ、申し訳ない。ちよっとおかん気質があるみたいで……。妹たちにも引かれることがあるから気をつけていたのですが」

確かに、こういう行動を咄嗟に取るのは難しい。

普通なかなか気がつかないはずだ。

恐らく、常日頃から妹たちの世話をしている、面倒見のいいお兄さんなのだろう。

そういうところがお母さんみたいだと言われてしまう所以なのかもしれないが、別に引かない。むしろ尊敬の眼差しで見つめてしまう。

自分が大雑把で気配りというものができない無頓着な性格だからだ。

愛莉が尊敬の念を抱いているのに、彼はそのことに気がついていない様子である。

少し頬を赤らめ、必死になって取り繕繕おうとしているのが見て取れた。

——なんだか、かわいらしい人だな。

最初は警察官というだけで、なんとなく近寄りがたいと思っていた。しかし、今は「たかどの」に対してそんなふうに思わない。

彼から靴ずれを防止するパッドを受け取り、心を込めて感謝を伝える。

「ありがとうございます。嬉しいです」

表情からも伝わるよう、とびつきの笑顔を向けることも忘れない。

「引くなんてあり得ないです。私、がさつで心配りとか全然できないから……尊敬しちゃいます」
ありがとうございます、ともう一度お礼を言ったあと、ベンチに座ったままでパンプスを脱ぐ。
彼にもらったパッドをパンプスのかかと部分に貼り付けたあと、恐る恐るパンプスを履いて立ち上がる。

ゆっくりその場で足踏みをしたけれど、先程からの痛みは軽減されていた。パッドのおかげで靴が直接肌に当たらなくなったからだろう。

ホッと胸を撫で下ろしたあと、堂を見上げる。

なぜか呆けた表情をしている彼を不思議に思いながらも、ペコッと勢いよく頭を下げた。
「本当にありがとうございます。痛みがなくなりました！」

これから二次会へと向かうところだし、会が終われば帰宅しなければならぬ。
まだまだ歩くので、これ以上靴ずれが悪化してしまったら歩けなくなるところだった。

「たかどの」さんのおかげですね」と言いつつ、彼は不思議そうに首を捻る。

「名前……」

「ああ、先程同僚の方がおっしゃっていたから……違いましたか？」

「いえ、合っています」

「よかった。どんな字を書かれるのですか？」

「たかどの」という名字は今まで聞いたことがなく、想像がつかない。
すると彼は「とりあえず向かいましょうか」と促してくる。

確かに二次会開始まで、あまり時間がない。急いだ方がいいだろう。

痛みが取れた足は動きも軽い。速く歩くことができそう。

しかし、彼の歩調はゆっくりだ。足が長い彼ならば、本来はもっと速く歩けるはず。

それをしないのは、愛莉を気遣って歩調を緩めてくれているからだろう。

彼が「おかん気質」と言われるのは、こうして人の気持ちを汲み取るのがうまくて優しいからに違いない。

彼の妹たちが羨ましい。こんなお兄さんが欲しい。

そんなふうに思いながら、横を歩く彼を見上げる。

「寺院などの本堂の『堂』の字ってわかりますか？」

「はい」

「『堂』一文字で『たかどの』と読みます」

「へえ……」

堂の字にそんな読み方があるなんて知らなかった。漢字は奥深いなあと感じながら、思いついたことをそのまま口にする。

「もしかして、ご実家はお寺ですか？」

「ははは、よく聞かれます」

やはり短絡的だったか。苦笑うと、彼は首を横に振った。

うちはごく普通の家ですよ、と笑みを浮かべると、彼は前方のレストランを指差す。

「貴女が探していたレストランは、あそこです」

彼の指差した先を見ると、確かにドレスアップした人たちが店の中に入っていくのが見えた。

店先まで来ると、小さな黒板に『本日貸し切り』の文字が書かれてある。このレストランで間違いないさそう。

「本当に真逆を探していたんですね……私」

一時間近くさまよっていても、見つからないはずである。

改めて自分の方向音痴さ、そして地図の見方が下手であることが露見されて頂^{うなだ}垂れてしまう。

肩を落としていると、堂は笑って慰めてくれた。

「今度はなるべく早めに人に聞いた方がいいですね。交番が近くにあるようでしたら、聞いてください。警官は答えられますから」

肝心の交番が見つからなかった愛莉にはなかなかハードルが高そうだが、それが迷子にならないための秘訣だろう。

「はい、そうします……」

素直に返事をしたあと、堂に頭を下げた。

「ここまで送っていただきましてありがとうございます」

「いえいえ、これも仕事の内ですから。お気になさらないでください」

では、と背中を向けて歩き出そうとする彼に慌てて声をかける。

「待ってください、堂さん！」

「え？」

振り返った彼を見ながら、バッグの中をガサゴソと探り出して財布を取り出した。

「靴ずれ防止パッドのお金、支払います。いくらでしたか？」

「いえ、いりません。私が勝手に購入したものですから。お気になさらないでください」

「いえいえ、そんな訳には——」

いかないです、と続けようとしたが、彼は首を横に振る。

「職務ではなく、ただ私が世話を焼きたくなっただけですから」

お構いなく、それだけ言うと、颯爽とその場をあとにしていく。

本当にいいのだろうか。そんな気持ちで見送っていると、彼は急に立ち止まった。

どうしたのかと不思議に思っていると、彼は振り返って言う。

「帰りは、ご友人と一緒に帰ることをおすすめます。では」

それだけ言うと、彼は駅へと向かって歩き出す。

彼の姿が見えなくなるまで見送ったあと「素敵な警察官さんだったな」と人の優しさを囁みしめながら会場へと入っていく。

懐かしい面々が、あちらこちらにいる。愛莉の姿を見て、友人たちが手を振ってきた。

「久しぶり、愛莉！ちゃんと辿り着けて偉いじゃん！」

「……一年ぶりに会った友人に対して、第一声がそれ？」

不貞腐れながら椅子に腰かけると、友人たちは口々に言ってくる。

「だって、愛莉の方向音痴は有名だもの。私たち、ずっと心配していたのよ？」

彼女らは顔を見合わせて、うんうんと深々と頷く。

「大学入って一年経ったあとも、構内で迷子になっていたじゃない」

「そうそう！それに就職試験の最終面接だって、試験会場になかなか辿り着けなくて青ざめて電話をかけてきたのは誰だったかな？」

「そう言えば、迷子失恋事件もあったわね……」

「あれは、あの男が酷いのよ」

「サイテーな男だったわよね。迷子になったって連絡入れてるのに、最終的に待ち合わせの場所に一時遅れたからって別れを切り出してくるなんて」

「愛莉が迷子気質だって知って、より別れを意識したって何様のつもり？」

「心が狭い男だったから、縁が切れてよかったのよ」

「顔を引き攣^{ひきづ}ってしまう。だが、友人たちが言っていることはすべて本当のことだ。」

「愛莉の迷子伝説を語らせたら、半日はかかるわよね」

面々は再び深く頷く。残念ながら愛莉も思わず頷いてしまった。

こうして今までの迷子による黒歴史を並べると、散々なことばかりだ。なんだか自分が可哀想になってくる。

しみじみとこれまでの迷子の歴史に苦い思いを抱いていると、友人たちはなぜか晴れやかな表情へと変化した。

「でも、こうして時間内に辿り着いたってことは、迷子にならなかったってことでしょ？」

よかったわねえ、と口々に言う友人たちを見て、ばつが悪くなりえへへと力なく笑う。

「残念。一時間ほど迷子になっておりました……」

この発言を聞いて、皆が「はあ!？」と大声を上げる。そして、一斉に愛莉を見てため息を零した。

「さっさと連絡を寄越してきなさいよ」

「そうよ。そうすれば迎えに行つたのに」

「私なんて愛莉から SOS が来るかと思って、スマホをずっと握りしめていたのよ」

「あ、私も！」

どうやら皆に心配をかけていたようだ。それも仕方がない。学生時代、彼女らは愛莉の迷子の歴史を目の当たりにしていたのだから。

心配するなという方が無理というものだろう。

散々お小言を言われたあと、どうやってここまで辿り着いたのかと聞かれたので素直に答えた。

「なるほど。警察官に聞くのが一番だよね」

「聞くんていうか……。私が同じ場所を行ったり来たりしていたのを見て、心配して声をかけてくれたっていうか」

自分で話している情けなくなってくる。肩を落としていると、彼女らは口を揃えて言い出した。

「でも、声をかけてきたのが警察官でよかったじゃない」

「え？」

「柄の悪い男とか、ナンパ目的だったりしたら質が悪かったわよ」

確かにその通りだ。変な人に絡まれなくてよかった、と胸を撫で下ろす。すると、友人は優しい言葉をかけてくれる。

「でも、無事辿り着いてよかったよ」

「うん、ありがとう。警察官の人、めっちゃいい人だったんだよ。人の温かみを感じたよ」

堂を思い浮かべ手を合わせて拝み出す愛莉を見て、友人たちはニンマリと意味深な笑みを浮かべた。

「お？ 恋に発展しそう？」
「はぁ!？」

今度は愛莉が声を上げてしまう。会場内は賑やかだったため目立つことはなかったが、慌てて口を手で押さえる。

「何を言っているのよ！」

「えー、だってあの心の狭い男と付き合ったのが最後でしょう？」

「……うん」

早々に破局を迎えたため、付き合ったと言っているものかどうかわからないが、その通りだ。あのときも一方的に言い寄られ、押され気味で付き合うことになった。

それなのに、結局すぐに相手は熱が冷めてしまい振られることになってしまったのである。なんとも苦い思い出だ。

その後、誰とも付き合っていないし、恋に発展するような出会いもしていない。

社会人になり、色々な人と関わってきた。しかし、運命の出会いは今のところ皆無だ。だからと言って、さすがにこれだけで恋には落ちないだろう。

——でも、堂さん。優しいし、格好良かったなあ。

ある意味、恋に落ちる要素はあった。だが、さすがにない。首を横に振って否定する。

「恋って難しいよねえ。どうやったら恋ってできるの？ どういうのが恋なの？」

生まれてこの方、恋らしきものに遭遇したことがない。

皆は「そんなに難しく考えなくてもいい」とは言ってくれるが、イマイチ恋するラインがわからずにいるのだ。

人によって恋する基準は様々だとは思う。

一緒にいて居心地がいいという人と付き合うこともあるだろうし、劇的な出会いで恋に落ちる人もいるだろう。

だが、ピンと来ない。だからこそ、焦る部分があるのも確かだ。

そんな愛莉を見て、皆が「いつかわかる日が来るって」と慰めてくれる。でも、そんな日が本当に来るのだろうか。

兆候が全くない今、慰めの言葉を聞いても心に響いてはこない。だけれど——

——いつか来るといいなあ。

そんな淡い期待を抱くだけに止めておいた。

恋ができなかったとき、悲しすぎるからだ。

少々不貞腐れ気味な愛莉だったが、この二次会の後に「これは運命だ！」と思えることが起きるなんて、このときは微塵にも感じていなかった。

二次会^{じふが}は恙なく終わりを迎え、新郎新婦に見送られながら店を出る。

このあと友人たちは三次会へと向かうようだが、愛莉は帰ることにした。

明日は早めに家を出て、セミナーに参加することが決まっているからだ。

入社して二年目の社員は全員参加が義務づけられているため、どうしても出席しなければなら
ない。

そのため今日は早めに帰って、しっかりと寝なければ。セミナーの途中で居眠りなんて御法度だ。
「一人で帰る」と言うと、友人たちは駅まで付き添ってくれると言ってくれた。

だが、それを丁重に遠慮した。

「大丈夫だよ。だって駅は目と鼻の先だし」

ふと堂の言葉——『ご友人と帰ることをおすすめします』と言われたことを思い出したが、さす
がに大丈夫だろう。

ここから駅まではほとんど一本道なので、今度は迷いようがないはずだ。

友人たちにそう言う「確かに」と納得してくれた。

「それでも迷子になって困ったら連絡ちょうだいね」という優しい言葉をかけてもらい、彼女らは

見送ったあとに駅への道をのんびりと歩き出す。

少しだけお酒を飲んだためか。それとも友人の幸せそうな顔を見たからか。

幸せ気分で駅までの道を歩いていく。

慣れないパンプスではあるけれど、堂に買ってもらったパッドのおかげで痛くはない。

そのことに、ホッと胸を撫で下ろす。

もし、あのとき堂が気を回してパッドをくれなかったら、あのまま痛い足を無理に動かして二次
会会場まで歩いただろう。

そんなことをしていれば、今頃痛みで歩けなくなっていたはずだ。

「堂さんに感謝だよね」

彼は「おかん気質」ではないか、引いてはいないか。そんな心配をしていたが、全くそんなふう
には思わなかった。

そのことを、もっとしっかり伝えておけばよかったと後悔する。

彼が勤務している交番の場所は知っているが、わざわざそのことだけを伝えにいくのも気が引
けた。

そう考えると、今後この地域で何か愛莉の身の上に問題が起きない限り、堂と会うことはないの
だろう。

ちよっぴり寂しい気持ちを抱きつつ、だけれど優しい人に出会えたことに感謝する。

心がほんわかと温かい。そんな幸せ気分浸っていると、背後から誰かに肩を掴まれた。

突然のことで驚きのあまり身体がビクツと震えてしまう。

「待って、愛莉ちゃん」

「え？」

驚いて振り向くと、そこには二次会に出席していた男性がいた。

二次会の司会をしていたその男性は、高木たかぎと呼ばれていたはずだ。

司会進行という立場で、出席者に満遍なく話しかけていたのは覚えている。

当然、愛莉とも挨拶程度だが話す機会があった。とはいえ、それだけの関係だ。

それなのに突然名前呼びをされて、ビックリしてしまった。

目を大きく見開いて驚いていると、高木は頬を赤く染めてこちらを見つめてくる。

「急に、ごめんね。それも名前呼びしちゃって。君の名字がわからなくて、名前で呼んじゃった」

「い、いえ……」

新婦を含め、周りの友達は皆が「愛莉」と名前呼びをしていた。

披露宴なら席次表が配られるところだが、二次会なのでそういった個人を特定できるようなものはない。

だからこそ周りが言っていた名前を覚えていて、声をかけてきたのだろう。

そのことに關しては理解できたが、どうして彼は愛莉を引き留めてきたのだろうか。

三次会に参加する面々は、次の会場へと向かっていくのを見送っている。

当然二次会の取りまとめをしていた彼は、三次会にも出席するものだとはかり思っていた。

それなのに、どうしてここにいるのだろうか。

「何かご用ですか？ それに三次会は出席しないんですか？」

「うん、僕も君と同じで明日の朝早いから。三次会は欠席させてもらったんだ。愛莉ちゃんも帰るって聞いたから、駅まで一緒にどうかと思つて」

「は、はあ……」

送ってくれるつもりなのだろう。だが、彼とはほとんど初対面だ。

これといった接点がないので、急に言われても困つてしまう。

彼にしてみたら厚意のつもりなのだろう。女性一人での夜道は危ないからと思つて声をかけてくれたに違いない。

それならば、と思つてOKの返事を出そうとした。だが、高木がニンマリと笑つたのを見て言葉を咄嗟に呑み込む。

「なあってね。それは口実」

「……口実？」

「そう。僕、愛莉ちゃんのことを気に入っちゃったんだ。だから、連絡先を教えてください」

「え？ えつと……」

馴れ馴れしく近づいてくる彼に恐怖を覚えているのだけれど、高木は愛莉が怯えていることに気がついていない様子だ。

ベタベタと身体に触れてきて、スマホを差し出してくる。

「ねえ、教えてよ？ 俺と真剣に付き合ってみない？」

「僕」から「俺」に変わっている。

愛莉に近づくために本性を隠して好青年を演じていた様子だが、少しずつそのメッキが剥がれてきているのだろう。

だんだん怖くなってきて、彼を振り切って逃げようとした。

しかし、腕を掴まれてしまい逃げられなくなってしまう。

「逃げるなんて酷くねえ？ 別に取って食おうなんて思っていないからさあ。連絡先を教えてよ」
「止めてください！ 私、一人で帰ります」

彼を振り切ろうとするのだけれど、強い力で腕を掴まれてしまつて身動きが取れない。

「別に減るもんじゃねえし、いいだろう？ ん？ もしかして俺の気を引こうとして、か弱い振りをしているのかなあ？ かーわいいー！」

どうしたらそんな考えに辿り着くのか。呆気に取られていると、彼は強引に手を引っ張ってくる。
「これから二人で飲もうよ。俺、いい店を知っているんだ」

「ヤダ！ 離してくださいっ！」

必死になって抗おうとするのだけれど、やはり男性の力は強い。逃げ出せなくて途方に暮れる。辺りを見回して助けを求めようとするのだけれど、誰もが我関せずの姿勢を保ったままだ。

視界がぼやけてくる。このままでは、この男によってどこかに連れ込まれてしまう。
この街の地理は全くわからないし、方向音痴なために断言はできない。

だが、駅への道とは違う方向に進んでいると思う。

——誰か助けて。

心の中で叫んだときだった。愛莉を強引に引っ張っていた高木の動きがピタリと止まる。

「その子の手を離しなさい」

低く迫力のある声だった。だが、その声に聞き覚えがあり、愛莉は咄嗟に視線を上げる。

「堂さん……っ！」

二次会会場へと送ってくれたときは、警察官の制服姿だった。

だが、今は私服姿だ。きつと勤務が終わり、帰る途中なのだろう。制服姿のときとは違った魅力
を放っていた。

堂は威圧的な空気を纏いながら、高木を冷酷な目で見つめる。

背が高くガッシリとした体型な上、整った顔の彼が鋭い目をしていると迫力がすごい。

背筋が凍るとは、こういう状態を言うのだろう。堂の迫力に愛莉は息を呑む。

だが、堂の雰囲気は圧倒されていたのは愛莉だけではなかったようだ。

高木もまた、彼の纏う空気感に圧倒されていた。

高木は、震えながら愛莉の腕を離す。すでに、彼は逃げ腰だ。

「で？ その子に何か用でもあるのか？」

「ひ、ひえ……っ」

高木が情けない声を出す。だが、それも仕方がないだろう。堂の姿があまりに怖くて、誰だっ

て恐れをなすはずだ。

「何か問題があるようなら、交番にでも行きましようか？」

堂は駅の方面を指差して、高木を見下ろした。

堂の声は、ますます低くなっていく。そのたびに周りの温度が下がっていく気がした。

高木はすっかり怯えてしまっていて、反論などできない様子だ。

堂が一步距離を縮める。それを見て、高木は転がるように逃げ出した。

あまりの逃げ足の速さに呆気に取られてみると、堂は心配そうに顔を覗き込んでくる。

先程までの威圧的な雰囲気から一変、すっかり優しい警察官の眼差しに変わっていた。

ドキッと心臓が今までにないほど高鳴り、なんだか苦しくなってくる。

切ないとか痛いとか、そういう苦しみではない。強いて言うならば……今までに体感したことがない類いのものだ。

「大丈夫ですか？」

彼の優しい声を聞いて、我慢していた涙が零れ落ちてしまう。

ポロポロと涙を流すと、堂はポケットティッシュを差し出してきた。

「すみません、こんなものしかありませんが」

「い、いえ……。ありがとうございます」

ヒックヒックとしゃくり上げながら、彼が手渡してくれたポケットティッシュを受け取る。

一枚取り出して涙を拭きながら、彼を見上げた。

「助かりました。本当にありがとうございました」

ぺこりと頭を下げると、彼は眉間に皺を寄せる。そして、高木が逃げ去った方面を見つめた。

「先程の男は知り合いですか？」

「知り合いというか……。二次会に出席していた方です」

「……ほとんど初対面ということですね」

コクンと小さく頷くと、彼はため息を零す。

「結婚式の二次会で新たな出会いを求めたいという人は多いですが……。それにしても強引な男でしたね」

新郎新婦の友人や同僚など、年齢が近い人たちが集まる会だ。

出会いがあるかも、と期待して出席している人はいらるだろう。その筆頭が、先程の高木だったのかもしれない。

めばしい相手を探しながら二次会に出席し、彼のお眼鏡にかなってしまったのが愛莉だったのだろう。

素敵な出会いだったとしたら、恋が芽生えるなんてことがあるかもしれない。

しかし、高木のように自分のエゴを勝手に押しつけ、強引に誘われたとしても嬉しくなどないのに。

ふと、堂を見上げる。すると、彼は愛莉を通行人の視線から隠すように立ってくれていた。

泣きじゃくっている愛莉を気遣ってくれているのだろう。

——やっぱり堂さんは優しい……

警察官という職業柄、色々と気を使ってくれているだけだ。

わかっているけれど、先程から彼の言動すべてにおいて鼓動が速まっていくのを感じていた。そのことに戸惑いつつも、この鼓動の意味がわかってますます胸が高鳴ってしまう。

顔を真っ赤にさせている愛莉を見て、堂は困ったような表情になる。

「大丈夫ですか？ 今日とはたくさんお酒を飲まれたんでしょう？」

「えっと……そう、そうです！ 飲みすぎちゃったかもしれないですね！」

愛莉の顔が赤くなってしまった理由は堂にある。だが、それを隠すために咄嗟に嘘をついてしまった。

——今、この気持ちに堂さんに伝わってしまったら困る！

背の高い堂を上目遣いで見つめたあと、どうしようもなく恥ずかしくなって視線をそらす。

最初は、優しくて親切な警察官という印象だった。その上とても格好いいし、何より制服が恐ろしいほど似合っていて素敵な人だなと思ったのは事実だ。

優しく接してもらえてほっこりとしていただけだったのに、こうしてまたもやピンチのときに助けてもらえれば胸はどうしたって高鳴ってしまう。

もっと、この人のことが知りたい。そう思った時点で悟った。

ああ、自分はこの人に初めての恋をしてしまったのだ、と。

意識してしまえば、恋に落ちていくスピードは加速していく。

彼がより魅力的に映ってしまい、直視できなくなってしまった。

だが、そんな愛莉を見て勘違いした堂は、ものすごく心配そうに顔を歪めている。

申し訳ないと思いながらも、彼の意識は今、愛莉に向けられていることに心が浮き立ってしまった。

「歩けます？ タクシーを呼びますか？」

「いえ、大丈夫です。まだ時間は早いですし、電車で帰ります」

本当に大丈夫？ と再度聞いてくる堂の目はかなり心配そうだ。それがヒシヒシと伝わってくる。これ以上心配をかけたくなって「大丈夫」と何度も言い続けていると、愛莉がとりあえずは大丈夫だと判断したのだろう。彼は駅まで送ってくれると申し出てくれた。

嬉しかったが、少し躊躇する。

堂は仕事終わりだろう。それなのに、職務の一環のようなことをさせてしまったのは申し訳ない。

渋っている愛莉の気持ちが伝わったのだろう。彼は目元を優しく緩めた。

「駅まですぐですから。行きましようか」

「そんな！ 申し訳ないです」

内心では嬉しい。もう少し彼と一緒にいたいと思っているのは本音だから。

それでも、やはり無理はさせたくない。

彼の勤務先である交番は、駅を挟んで反対側だ。駅を越えてこの付近まで来ていたということは、堂の自宅はこちら側にあるはずで、駅に向かえば彼はもう一度戻ることになる。

二度手間になるのがわかっていて、お願いなどできない。

彼は警察官の任務として声をかけてくれているのだらうけれど、堂にとっては勤務時間外だ。

必死に遠慮する愛莉に対し、彼は真剣な表情で見下ろしてくる。

「では、私にずっと貴女のことを心配し続けると？」

「え？」

きょんとしている、彼はズイツと顔を近づけてきた。とはいえ、常識的な距離感だ。

しかし、彼に対して初恋を意識してしまった今、ドキッと大きく胸が高鳴ってしまう。

「もしかしたら、貴女がまた迷子になってしまいかもしれない」

「うっ」

「また、変な男に絡まれてしまう可能性だってある」

「ううっ」

「そんな心配を、これからずっとしていると言うのですか？」

そう言われてしまうと、こちらとしては何も言えなくなってしまう。

愛莉はこの数時間、堂に助けてもらってばかりだ。

迷子気質であるということもバレてしまっているし、先程男性に絡まれていたところを助けてもらったばかりである。

それなのに「大丈夫です」と胸を張って言ったとしても信用できないだろう。

居たたまれなくなつて身体を小さく丸めたあと、彼を見上げる。

「……お願いしてもいいですか？」

堂と視線が絡む。すると、なぜか彼は真顔になり言葉に詰まったように見える。

どうしたのかな、と不思議に思ったのは一瞬だった。

彼はすぐに柔らかな表情に戻り、愛莉に笑いかけてくる。

「もちろんです。さあ、行きましょうか」

「はい」

駅へと向かう道を堂と肩を並べて歩いていく。まさかこんなふうに二度も彼に助けてもらうことになるうとは思ってもいなかった。

——やっぱり運命を感じてしまうな……

横を歩く堂にこっそりと視線を向ける。やはり背が高い。横顔も、とても素敵だ。

現在、愛莉の心臓は壊れてしまうのではないかと心配になるほど激しく脈打っている。

とても緊張しているが、こうして彼と一緒にいられることが嬉しい。

特にこれといった会話は無いが、この時間がとても幸せに感じた。

ちょうど信号は赤に変わり、足を止める。

この横断歩道を渡れば、駅へと辿り着いてしまう。彼と過ごせる時間は残りわずかだ。

堂は駅前の交番に勤務していることはわかっている。だから、この街に来れば堂に再び会えるだろう。

だが、何も用事がないのに彼に話しかけることはおろか、アプローチなんてできるはずがない。

——今しかないよね？

クラッチバッグを持つ手にギュッと力が入った。

バッグの中にはスマホが入っている。さりげなく取り出して、堂に連絡先を聞いてしまおうか。

——でも、どうやって？

何か口実がなければ聞き出せない。だが、その口実が何も浮かばなかった。

愛莉に優しくしてくれたのは、彼が警察官だからだ。

仕事熱心な彼は、困っている愛莉を見て放置できなかった。ただ、それだけだ。

それなのに愛莉が唐突に「連絡先を教えてください」と言ったとしても困惑されるだけだろう。

お礼をしたからという口実を使つたとしても、遠慮されるのがオチだ。

でも、何か案を捻り出したい。そうしなければ、今後こんなふうに堂と話すことはできないかもしれないのに。

「青になりましたよ」

無情にも信号は青になる。愕然としながらも足を進め、改札前まで辿り着いてしまった。

「では、私はここで。気をつけて帰ってくださいね」

堂は、キラキラとした笑みを向けてくる。眩しくて直視できないほどの爽やかさだ。

彼の人の良さが滲み出ている表情を見て、のぼせてしまう。

モジモジしている愛莉を余所に、堂は「それでは」とこれまたとびっきりの笑顔で手をヒラヒラとさせて去っていく。

「ああ……、ちょ、ちょっと待って」

弱々しい愛莉の声は雑踏の中へと見事に消えていく。もちろん、背中を向けて駅の構内を出て行くこうとしている堂の耳に入るはずもない。

勇気が出せなかった自分にガツカリする。だが、まだ諦めてはダメだと自身を鼓舞した。

堂が、この駅前の交番に勤務していることはわかっている。まだまだ彼と会うチャンスはあるだろう。

その日は自分にそんなふうに言い聞かせて、次のチャンスを待とうと思ったのだが……

その後、あの交番へ何度か足を運んだのだが、堂の姿を見ることは叶わなかった。

彼の勤務時にうまく合わせられなかったのか。それとも、堂はどこかに異動になったのか。

それをあの交番で尋ねる訳にもいかず、半ば諦めていた。

初めての恋は、このまま終わってしまう。時間とともに風化されていき、愛莉の脳裏から消えていく。

初恋は実らないとはよく聞くが、実る実らないという前に恋というものが本当に存在したのか、わからない状況になってしまった。

この年齢になるまで恋というものをしたことがなかった自分は、結局のところ恋に無縁なのかもしれない。

そんなふうに思っていた愛莉に、ある日唐突に奇跡が起きた。

「うそ……え？ 堂さん？」

警察官の堂という人は、実は幻だったのではないか。妄想の中で恋をしていただけなのではないか。

そんなふうに思い込んで諦めようとしていたのに、恋の神様は愛莉を見捨てなかったのだ。仕事終わり、疲れた身体でとぼとぼと歩く愛莉の目に信じられない光景が映る。

愛莉が住む街の駅前交番に堂の姿が見えたのだ。

——いやいや、こんな都合のいい話なんてある？

緊張と高揚でドキドキしてくる。心臓の辺りを服の上から押さえながら、慌てて交番に背を向ける。

あれだけ夢だ幻だと思い込もうとしていたので、思わずこれは現実なのかと疑いたくなってしまう。

頬をむぎゅっと摘まみ、力強く引つ張ってみる。

「痛い……。痛いよお」

頬がヒリヒリとして熱を持っている。

痛みを感じるということは、夢ではない。現実だ。

ふうと深呼吸をしたあと、ゆっくりと振り返る。やはり交番前には堂がいた。

制服を着ているということは、仕事中だ。彼は、この街に異動になったのだろうか。

あの二次会の日から、早ひと月。短いようで、長い日々だった。

堂のことを想い、悶々としていた毎日。だが、彼は愛莉の目の前に再び現れたのだ。

——やっぱり、これは運命かもしれない！

初恋を諦めるな。そんな天の声が聞こえた……。気がした。

信号が青になる。夢見心地になりながらも、足取りは軽い。ゆっくりと堂に近づいていく。

だが、ここで臆病風が吹いてしまった。果たして彼は愛莉のことを覚えているだろうか。

警察官という職業柄、道の案内などは日常茶飯事だろう。いちいち道を教えた人全員を、それも

ひと月前に会った愛莉のことを覚えているだろうか。

横断歩道を渡りきる。

浮き立っていた足はだんだんと動きが遅くなり、その場に立ち止まってしまった。

心は、彼に再会できたことを喜んでいる。

声をかけて、この前のお礼を言いたい。その気持ちに偽りは無い。

だけれど、なぜか勇気が出てこずに困ってしまう。

どちらかといえば猪突猛進タイプだと自覚しているのに、どうして尻込みしてしまうのか。

いつもの愛莉であつたら、確実に声をかけているだろう。それなのに、なぜ……？

——恋ってなんだか怖い。

恋愛は綺麗事だけではないということのはわかってはいた。

だが、それは頭でわかっていただけで本当のところはわかっていなかったのかもしれない。

何事にもチャレンジあるのみ！ そんなふうに生きてきたのに、どうしても躊躇してしまう。

人を好きになるというのは、恐怖という感情との背中合わせなのかもしれない。

でも、行動に起こさなければ何も始まらないだろう。
勇気を振り絞って声をかけようとしたとき、堂と視線が合った。

ドキッと心臓が大きく音を立てる。

彼と目が合ったと、ときめくのと同時に怖さを感じた。

もし、愛莉のことを覚えていなかったらどうしよう。そんな不安が募っていく。

震える唇で彼の名前を紡ぐとすると、堂は愛莉を見て驚いた表情を浮かべた。

どうやら彼は愛莉のことを覚えてくれていたようだ。

ホッと安堵したのと同時に、喜びが胸に広がっていく。

彼に駆け寄ると、堂はひと月前に愛莉を絶望の淵から救ってくれたときと同じ笑顔を向けてくれた。

それが嬉しくて、思わず声が上ずってしまう。

「私のこと、覚えていますか？」

「もちろんです」

目元を緩ませてほほ笑む様子は、やはり爽やかイケメンだ。ますます胸の鼓動が高鳴っていくのがわかる。

高揚する気持ちを必死に抑えながら、堂に頭を下げた。

「この前は、本当にありがとうございました。堂さんのおかげで助かりました」

「いえ、ご無事で何よりです。それに職務ですから、お気になさらず」

そうなのかもしれないが、それでも救われた人間がここに一人いるのだ。

お礼の言葉ぐらいいは受け取ってもらいたい。

「でも、二度もご迷惑をかけてしまいました……。本当にありがとうございました」

深々ともう一度頭を下げた愛莉に、堂は「お礼はそれぐらいで大丈夫ですから」と謙虚な返事をしてきた。

やはり堂は優しいし、警察官の鑑のような人だ。

惚けている愛莉を見て、彼は困ったように眉尻を下げる。

「実はあのあと、とても心配していたんです」

「え？」

「あの男のせいで、怖い思いをしていたらうから」

「あ……」

確かに、高木に絡まれたときは怖かった。だが、その記憶は堂によって塗り替えられていたのかもしれない。

その後、高木のことなんてちっとも思い出さなかったのが証拠だ。

そのことに気がついて、どれだけ自分はお気楽なのかと胸中で苦笑した。

えへへと笑ってごまかすと、堂は柔らかな表情をする。

「元氣そうでホッとしました」

「堂さん……」

胸が幸せな音を立て始め、ますます彼への好感度はアップしていく。今、絶対に顔は真っ赤になっているが、すっかり日も落ちて辺りが暗くなっているので彼にはバレていないはず。

そのことにホッとしていると、堂は優しく声をかけてくる。

「仕事帰りでしょう？ お疲れ様です」

「はい、ありがとうございます」

元氣よく頭を下げてお礼を言うのと、彼は真剣な眼差しを向けてきた。

ドキッと胸が高鳴ってしまう。彼は何を言おうとしているのだろうか。

——もしかして、運命を感じたのは私だけではないとか？

彼もまたひと月前の出来事が脳裏に焼き付いていて、愛莉とどこかでまた会えないかと望んでいるのかもしれない。

だからこそ、愛莉を覚えていた。そんなことはないだろうか。

少しの期待を込めながら彼の言葉を待っていると、愛莉の目の前に一枚のチラシを差し出してきた。防犯を促すものだ。

『危険！ 夜の一人歩き！』と大きく見出しがあり、不審者への注意を促すイラストが描かれている。

それを見て目を丸くした愛莉に、堂は警告してきた。

「ここ最近、市内で不審者が多発しています。特に夜。女性の一人歩きは危険です。なるべく人通

りのあるところ、街灯が多いところを選んでお帰りください」

「は、はい……」

あまりの圧にビックリしながらも何度か頷くと、堂はより真剣な眼差しを向けてくる。

「どちらの道で帰られますか？」

「えっと……、この道をまっすぐです」

自宅へと向かう道は二つある。一つは今、堂に説明した道。もう一つは、街灯が少なく人通りが少ない道だ。

本音を言えば後者の方が早く帰れる。

だが、夜の一人歩きはやっぱり怖いので、その道を利用するのはお日様が出ている間だけだと決めているのだ。

それに最短距離ではあるのだが、坂道や階段が多いのも敬遠している理由である。

そのことを堂に伝えると、彼は満足したように深く頷いた。

「いい心がけだと思います！ ……あ！」

力説したあと、彼は我に返ったようで恥ずかしそうに謝ってくる。

「すみません、職業柄どうしても説教くさくなってしまうて」

照れている彼を見て、なんだか嬉しくなる。

フフツと笑い声を上げると、彼もまた照れ隠しのように笑う。

その笑みはなんだか少年のように見えて、より親近感を覚えた。